

浦島太郎

当院へ来られる患者さんで93歳の男性がおられます。

地元の小学校を卒業されていることから共通の話題があり、

診察室でもよま話をするようになりました。

昔は1学年に12クラスもあるマンモス小学校であったこととか、

校舎のすぐ横を蒸気機関車が煙を上げて走っていたこと

をなつかしく思い出して話していた時でした。

その方が急に顔を曇らせながら「それが・・・」と

言葉を切られました。

「実は同じクラスの友人が皆亡くなってしもうて、

同級生がもう一人もおりませんのや。」と言葉を絞り出す

ように言われ、「ほんまに寂しい寂しいですわ。」

「東京に一人同級生がおったんやけど、それも去年亡くなってしもうて。」

「住んでる周りの人たちも知らん顔の人たちばかりやし、今の消防団の人も全く知らん人ばかりですわ。」

「娘が同居して一緒におるんですが、朝早く仕事に出て、帰りは夜遅いので一人暮らしと一緒にです。」

このとき私は現代では竜宮城へ行かなくても、また玉手箱を開けなくても、ただ年齢を重ねるだけで浦島太郎状態になることを実感しました。

竜宮城に居たのは3日だったが、故郷の浜辺に着いた時は300年後の世界。

元居た家も村も無く、道に行き逢う人々は顔も知らない人ばかり。

周りに誰も知った人がいないというのはかなり苦痛な現実です。

どこか他国を旅行していて周囲の人を知らないのならともかく、

自分が生まれ育った場所で誰も知った人が居ないというのは……

話しかけるほど親しい人はおらず、相手もこちらを胡散臭そうに見る、

あるいは見向きもしない。

自分が生まれた町なのに、朝から晩まで誰とも会話もすることなく過ごす

というのも、精神的につらい事です。

周囲の人が病気になったり、事故に遭ったり、老いて身体が動かなくなったり

して一人また一人と姿が見えなくなって、気が付くと自分だけが残っている。

現実の社会においては、会社で仕事上の付き合いのあった人も

会社を辞めると付き合いがなくなり、対話する相手が減っていきます。

このようにして、高齢化社会は長生きをするというだけで、

あちこちに浦島太郎を生み出しているようです。